

土 淨



四月號

昭和十年五月廿三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和二十一年四月一日發行
昭和二十一年三月二十五日印刷
昭和二十一年四月一日發行

第二十二卷

第四號

卷 頭 言 (四月號)

讀賣新聞の立正交成會スクープは、ことの是非はとに角として、沈滞した宗教界に何等かの刺戟を與えたことは否めない。

「叩けばふくれる」と、新興教團をフグ扱いにしている向きもあるが、問題はふくれるとかふくれないとかの點ではない。「叩かれる」という點に問題がある。

今度の問題の發端は土地擴張にからむ不正行爲云云であつて、一見、宗教・信仰とは無關係のようであつたが、それが、段々に筋をたぐられて、とうとう、信者強迫とか、教祖の獨裁とかいつたところにまで及んで來、人權問題にからみ合うことにもなつて來た。

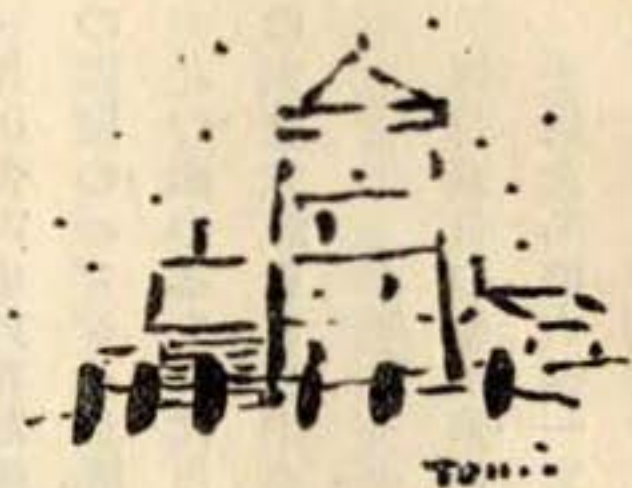
蓋し、人權に關しては、他のなにものよりも、第一に、宗教教團に於いてこそ、これが守られ、且つ尊重されるべきである。むしろ、宗教は人權尊重を基礎としてのみ成り立ち得るのである。その肝心の宗教々團が、ジャーナリズムから叩かれて、人權擁護委員會にまで持ちこまれるとは、正に、世の中も變れば變つたもの。教祖が信徒に説教されるといつた形である。

ふくれるのもよし、しほむのもよい。然しその前に、叩かれるということの裏に秘むものをよく見極めたい。いやしくも宗教の名を以つて成る組織の中に、叩かれる「要素」が含まれているということは、それだけでも吾々は大いに反省すべき必要を痛感するのである。

目 次 (花まつり號)

山 寺 の 春	吉田 絃 二 郎(1)
降 誕	増谷文雄(4)
漫漫的・快快的	安居香山(18)
佛教入門(六)	佐藤密雄(22)
童話 花まつり	寺田 豊子(7)
新刊紹介	(27)
新興宗教讀本(七)	竹中 信常(23)

座談會	仁戸田六三郎	司會
春 と 宗 教	高瀬 廣居 内山 房	竹中 信常(10)



山寺の春

吉田 絃二郎

ロシヤにメレジュコフスキイという作家があつた。ロシヤの革命を避けてパリに亡命した巨匠である。

かれの「藝術家としてのトルストイ及びドストイエフスキイ論」のなかに、古代印度の傳説から引用している佛陀の慈悲に關する物語がある。

昔惡魔が兀鷹のすがたに化けて、鳩を追いかけた。鳩は佛陀の懷にとびこんだ。惡魔は佛陀を詰つて言つた。

「わしは鳩を食うことができぬなら、わしは飢死にせねばなりません。あなたは何故鳩だけに慈悲を垂れて、わしには慈悲の眼をそそぎなさらぬのです。もしあなたが鳩を殺すのがいやならば、あなたの身を切り取つて、鳩の肉と同じ重さの肉をわしにください。」

佛陀はうなづかれた。惡魔は秤はかりを持つて來た。佛陀は秤の一方の皿に鳩を載せ、更に片方には自分の肉を切つて載せられたが、秤は動かなかつた。佛陀はさらにご自分の肉を切り秤に載せられたが秤は鳩の方へ傾いていた。佛陀はさらに肉を切り、骨を切つて秤の皿に載せられたが秤は

鳩の方へ傾いていた。佛陀はついにご自分自身を秤の上へ投げ出された。秤ははじめて佛陀の方へ傾いた。

メレジュコフスキイは「マアカス・アウレリウス論」の中に尙お一つ佛陀の慈悲について物語りを引用している。

佛陀は幾年も、人間愛慾の繼を斷ち切つて苦行をつづけられた。その結果として將に梵天の世界に入り、大悟の境に詣らんとせられた。その折のことであつた。かねて枯木のようになつた佛陀の腕に巢食うていた一羽の燕が何處かへ飛んで行つたきり歸つて來なかつた。

すでに愛慾の世界から離脱した筈の佛陀でありながら、佛陀は毎日歸り來ぬ一羽の燕を思つては悲しんでおいでになつた。

四月八日の降誕をたたえるために、東洋人ならぬ外國の文豪の心を引きつけた釋尊の姿を描いたが、今日は日本國中の山も野も巷も花でかざられている。

片田舎の小さいな病院の窓のシクラメンも、大きな都會の幸福から見捨てられたような屋根裏の部屋のパンジイも降誕をたたえてそよぐ。

北の國の雪もまだらに残つた山村の暗い病室にかざられたただ一輪の黄水仙も、今日は釋尊の大慈大悲をささやくであらう。

四月八日の朝が來るごとに、故郷の古城のような高い石垣を築き上げた山寺が映つて來る。

子供たちは大抵一文錢一枚か二枚を握り、青い竹筒を提げ、高い石磴を登つて行つた。

本堂の正面に美しい花御堂が飾られてあつた。子供たちは青い竹干杓で、誕生佛の頭からかけ

た甘菜を、竹筒にいただいて歸つて來るのであつた。

菜の花、薊、椿、蓮華草、山吹、つつじ、いろいろの花にかざられた花御堂の眞ん中に、天上天下を指さしていられる素つ裸の釋尊は、子供たちにとつては美しいお伽の世界の存在であり、虹の世界と現實の世界が如實に結ばれたものであつた。子供たちは裸の誕生佛に最も深い親しみを感じた。そこには新たに生まれ出づる生命の偉大なるよろこびや光明や翹望が子供たちにも、幽かではあるが、感じ取られるのであつた。ほほ笑ましい親しささえ感じられた。

そこの本堂では涅槃の繪や地獄極樂の繪を見た。地獄の繪では血の池、劍の山など恐ろしい場面の一齣一齣がいつまでも眼底に刻みつけられていたが、極樂世界のことはどんな繪であつたか殆んど記憶していない。

もう三十幾年の昔になるが、わたくしは天城の麓の庵寺で、庵主が黙々として花御堂をこしらえていたのを、溪川をへだてて眺めたことがあつた。軒も柱も啄木鳥に啄かれて破れたままの山の庵寺に花御堂を作っている庵主を見ると寂びしいながらに何か知らずいものを感ぜないではおられなかつた。

さらに數年後の春であつた。わたくしはたまたま道づれになつた中年の雲水と雨に濡れつつ伊豆の山路をたどつたことがあつた。雲水は大震災に東京で、妻と幾人かの子を失つたので發心して、雲水となり、二三年前から伊豆の山寺に落ちついてしていると物語つていた。

やがて別れて雲水は山を越えて行つた。その後ろ姿をながめていると、かつて、天城の麓の庵寺で黙々と花御堂をこしらえていた庵主のことが思い出されるのであつた。「あの孤獨な庵主にも、雲水に似た物語りがあつたのかも知れない。」こんなことを考えながらわたくしは遠ざかり行く雲水を見送つた。

降誕



増 谷 文 雄

一

きつと私だけのことではあるまいが、四月八日という日は、私には、理窟ぬきでうれしい日である。

その日は、思い出にみちている。その日には、花がひらく。行誠上人に、

さくら花にほふ吉野の山ながら

我がみほとけにたてまつらばや

という歌があるが、私には、この日を中心として櫻花がけんをきそうのも、釋迦牟尼の降誕をいわうためにか思われない。

むろん、そんな筈はないのであろう。だが、この大いなる聖者の降誕の日は、もはや、理窟をこえて、私どもにうれしい日、美しい日となつているのである。

ふるい言い方のなかに、「釋子」という言葉がある。あるいは、また「法子」という言葉がある。私どもは、肉體的にいえば、むろん釋尊の血すじを引いている譯ではない。民族的な見地からみれば、釋尊と私どもとは、まつたく異つた民族に屬している。それにも拘らず、私どもにとつては、釋尊という方は、まつたく無縁の人とは、どうしても思えないのである。

釋尊は、しばしば、その弟子たちをかえりみて、なん

じたちは、「法によりて生れたるもの」であると呼びかけたことがあつた。人間はその生涯に二度うまれる。その一度は、父母に生をうけて、肉體的に生れるそれであり、その再度は、わが生涯の人生の原理を、えらびとつて、人間として確立するそれである。そのことを、古來、「再生」といい、もしくは「新生」という。しかし、いまこの「再生」を釋尊のおしえによつて敢行した人々が、釋尊によつてかく呼びかけられたことは、まことに道理あることであつたと言わねばならない。

そして、おなじ呼びかけは、また、私ども佛教徒一般にたいしても、そのまま當てはまるであらう。私どももまた、釋子であり、法子であり、法によりてその再生を敢行した者であると言いうるであらう。つまるところ、釋尊はわれらの精神の父祖であり、われらは釋尊の精神的な末裔である。

その父祖の誕生日を、理窟ぬきでうれしいと思うのは、まさに、末裔の眞情として、ふさわしいことであらう。

二

しかるに、私は、最近、「佛陀」の一卷をものして、この父祖たる釋尊にまつわる空想的傳説をはぎとるといふいとなみをした。その意圖について、ここに、すこし

く辯明しておきたい。

傳説はうつくしい。そして、重い。できることならばそれをそつとしておくことに越したことはないと思う。

この師は、ルンビニの苑の、花うるわしいまん中で、御母の右わきの下から生れさせたという。生れおちると四方に七歩をはこんで、天上天下、唯我獨尊と、聲高く宣言したもうたという。その赤子なる釋尊像に甘露の水をそそいで、年ごとにその降誕を祝うたおさなき日の思い出は、うばい去るには、あまりにも美しく、たつとく、そして不思議な重さをもつてゐる。

それにもかかわらず、私がこの師にまつわる空想的傳説をはぎとろうとしたのは、ほかでもない。私は、この師をもつと身近かに感じとりたいたと思つたからである。この師が、私どもとおなじように、この地上に生をいとなんだ方であることを、もつと切實に感じとりたいたと思つたからである。

ある西歐の學者は、ソクラテスについて、「この人が我々とおなじように、この地上に生をいとなんだ人である」ということを、我々は幾度おもしろくおこしても、なお足りないのであらう」という意味のことを語つたことがあつたが、私どもにとつては、おなじことが、釋尊について言いうるであらうと思う。

私どもは、釋尊のいとなまれた事蹟を、人間のなしう

る最高のものであると思う。それは殆んど、人間として考えられないほどの立派なものであると思う。だが、それにもかかわらず、釋尊は、私どもとおなじく、この地上に生をいとなんだ人間であられたということは、私どもにとつて、このうえもなく、うれしいことであり、また勵ましであるのである。

三

ヨーロッパの學者たちのなかには、佛教について知りはじめたところ、釋迦牟尼という人物は、きつと地上の現實の存在ではなくて、なにか太陽神話などから轉化し、創作されたものであらうと想像したものがあつた。そう言われてみると、私どもは、むろん、とんでもないと抗議せずにはいられないであらう。だが、これまで私どもに傳えられている釋尊の傳記というものは、それほどまでに、この師の地上的な人間性をおおいかくし、この師を天上的な存在にまつりあげてしまつていたのである。

だが、よく氣をつけて、阿含部の諸説をひもどいてみると、そこには、もつとちがつた釋尊の御すがたが記しとどめられている。そこに記しとどめられているこの師のすがたは、もつと地上的であり、もつと人間的であられる。もつと地上的でありながら、もつと立派であられる。もつと人間的であるから、もつと親しみぶかい方で

あられる。

たとえば、この師は、しばしば、疲れて背痛を感ぜられたことが、阿含部の諸經には記しとどめられてある。人間であられたからには、お疲れにもなつたであらう。また、たびたび病まれたこともあつたであらう。それにもかかわらず、たゆむことなく、四十五年にわたる人間教化の旅をつづけたもうた。

四十五年の傳道生活といえ、世の多くの宗教者のなかにも、これほどの長い期間にわたる傳道教化をいとなんだ者は、ほとんどないようである。それを、この師は、天上的な不死身をもつて營んだのではなくして、つかれながら、背痛をやまれながら、人間の弱質を背負いながら、いとなんで來られたのである。そのことが、私にとつては、いよいよ立派な、いよいよ有難いことに思えてならないのである。

そうした心持ちで、私は、この師の地上的な、人間的な御すがたをもとめてきた。そして、求めいだすごとに、この師は、いよいよ有難く、いよいよ立派に、かつ身近かに感じられてくるのである。

(外國語大學教授、大正大學、東京大學講師)

童話

花まつり



寺田 豊子

うららかな春の光、かげろうを浴びて、麻耶夫人は運のうてなに、静かに腰を下しておりました。

見渡す限り廣々とした野山を、蝶蝶にでもなつて、とんで行つてみたい、そう思つた時「麻耶様、さあいらつしやいませ。お手をお

かとおもいました。

疲れ果てて、もとの運のうてなに戻つた時、麻耶夫人は何をみたでありましょう。

小さな愛らしい男の子が、じつと麻耶夫人をみつめていたのです。「わたくしのかあさまですか。」

とり致しましょう。あなたのお好きのところへ、御案内いたしましょう。花の園へでも、蜜蜂のくにへでも。」

どこからか、黄色い蝶の群が寄つて来て、麻耶夫人の手をとり、足をと

り、やがてかげろうの中をゆらりゆらり、さながら、蝶の女王かと思われ

るようになつてめづつたのでした。

静かな、王宮のくらしから、青空の世界をとびまわつた麻耶夫人は、ただめづらしく、蝶にさそ

われるままに、世界のすみずみまでとびまわつた

「まあ、あなたは——。」

「わたくしのかあさまですね。そうです。ほんとうにそうです。」

愛らしい子どもは、うろたえている麻耶夫人を、じつとなつかしそ

うに見入るのです。

——私は一體どうしたことであらう。あの蝶たちとたわむれて遊んで

いる間に、大事な自分の子どもを落してしまつたのであらうか。それとも、わたくしの知らない間に、わたくしの大事な子はもう生れてしまつたのであらうか。それにしても、もうこんなにした

しくものなどを言つたりして——

不思議そうに、思い惑う麻耶夫人は、今、わが膝にしかと抱くこの子こそ、間違ひもなく、幾月か待ちわびたわが子であるとおもえば、もうひたすらうれしく、なつかしく、たゞ涙が頬をつたい、あらためて、膝の子どもをしかと抱くのでした。もう何年か膝にのせていた子のように。

愛らしい子は、つと母の膝から立上り、「かあさま、なつかしいかあさま。長い間、くるしい目にお合せいたしました。わたくしはその御恩を忘れません。わたくしは今、やさしいかあさまのお顔を拜し、ただうれしくてしかたがありません。さあ、御恩に報ゆる

べきことをこれからしなければなりません。
では——。」

といい終るか終らないうち、いとしい子ども
の姿は消えてしまつたではありませんか。

「あゝ、わが子、いとしい子どもよ。わたく
しの大事なこともよ。いけません、何故わた
くしからはなれて行つたのです。待つて、待
つて。このかあさまをおいて何處へ行くの。

わたくしも今、あなたの後から行きますよ。あ
あ、誰か、このわたくしをわが子の許へ——。」

麻耶夫人は身も心もあせるばかり。はるか、
子どもの消えて行つたと思われるあたりが、
春の陽ざしより一段と光りかがやいているよ
うでした。

「麻耶様、如何なさいました。何をおなげき
なさいます。」

「ああ蝶々さん。わたくしを、わたくしを、
早く、あのずうーつと光りかがやいている、
あの先まで。あそこに、わたくしのかわいい
子どもがいるのです。お願いです、さき程の
ように、わたくしをみんなで軽がると、あの
邊までつれていつて下さいませ。わたくしは
どうしても。かわいいわたくしのあの子にあ
いたいのですから。あの子をわたくしの許ま
でつれて來たいのです。」

「麻耶さま、それは御無理でございましょう。

わたくしたちはこんな蝶々の身でございませ
けれど、わたくしたちには、あの尊い、あなた
の御子様のお心がよくわかつております。

あのお方は、決して、あなたさまをお捨てに
なつたのではございません。いつも、あなた
の許においでなのです。お姿だけはあのよう
に行かれても、あなたのお心の中から、世界
中をみそなわしていられます。さあ、もうそ
ろそろわたくしどもで、あなたさまを御殿へ
おつれいたしましょう。おかげでも引くとい
けませんから。」

黄色い蝶は再び、麻耶夫人の手をとり足を
とりかけろうの中をとび立つて行くのでし
た。

× × ×

ちい ちい ちい

びい びい びい

朝の光がさーんとふりそそぎ、窓かけが静
かにゆれました。

うすぎぬの衾の中から、麻耶夫人はしずか
に眼をさました。そして、そつと両手を
自分の下腹に當ててみました。わが子はまだ
胎内にしつかりと宿つております。全身には
かすかに汗をかき、今更ながら、ほつとした

氣持で床の上に起き上りました。

それにしても、不思議な夢ではありません
か。一體、これはどういうことなのでしょう。

かすかな不安に、なおも両手でしつかりとお
腹をおさえ、今朝はまた一そうまばゆい朝の
光を、麻耶夫人はしばしみつめておりました

ちい ちい ちい

びい びい びい

小鳥の囀りも、この朝ははげしいようです。
王宮のあるじ、淨飯大王はこの時、靜かに
麻耶夫人の許へ入つてこられました。

「妃よ、氣分は如何。」

「王さま、わたくしはさきほど、何か不思議
な夢をみました。何かわるいことでもござい
ましようか。」

「妃よ。心配なさらぬがよい。わしがついて
いるではないか。」

「はい。でも生れる子どもに何かまちがい
も。」

「いや、いや。何もかも、みほとけに心をまか
すがよい。春も早やたけなわ。今朝はまたこ
とのほかの美しい日より。そろそろと散歩で
もされたら、氣分もなおろうかと思うが——。」

「はい、そういたしましたよう。」

妃のすなおな心は王の力強い言葉に、もう

すつかり消え、いつしか、淨飯王の腕にしかと縋つておりました。

やがて麻耶夫人は、お供のものたちと王宮の庭へ歩みを運びました。

しずかに想いめぐらせば、胎内で成長したわが子の力強い動きが、生きたしるしが、あれほどの夢になつて現れたのかも知れない。いといい。こんなにもいい胎内のわが子。麻耶夫人はひとときも待ちかねる程、わが子戀しさに、うつらうつらと歩を運んでおりましたが、戀しさが嵩じる程に、お腹の痛みを覚え、やがてそれは顔の色にも現れて來ました。お供の人々も今はそれと感ずきました。

いよいよ御生誕。お供のものたちも急に氣色立つて來ました。早速、麻耶夫人もろとも一同とつて返し、王宮はいやが上にもただならぬ空氣が漂いはじめました。

美しい車が用意されました。

刻々に迫り來る不安と喜び。然し、淨飯王の御言葉に従い、麻耶夫人はただ大いなるみ佛の力に縋つて、眼を閉じつつ運ばれて行きました。

(9)

やがてルンビニーの苑にさしかかりました。折も折、春爛漫、百花咲き亂れ、咽せかえるような花の香りと小鳥の囀りは、既に王

子の生誕を壽ぐかのようにでした。

車が一ゆれしたとおもうと、麻耶夫人は全身凍るかのような痛みに、ついに堪えかね、行列はここで中止されなければならなくなりました。

美しいルンビニーの苑は今や王子生誕の産舎となりました。野や山や森に住むあらゆる小鳥やけものや虫に至るまで、既にこの事を豫期していた如く、忽ちにして集り、またたく間に、五色の、世にも美しく香ぐわしい産舎は出來上りました。

ついに身も世もあらぬ程に痛みにこらえて、麻耶夫人はむせぶような花の香りに己を遠く忘れ、眼の前が急にまぶしく、何もみえなくなつたと思う程に、四方の山々、森々にこだまする小鳥たちの一きわ甲高い囀りをきいた時、麻耶夫人のまなこの彼方には輝くばかりに尊い我が子の姿を拜することが出來たのです。

溢れる涙は、肩から腕をつたい、そればかりではありません。天地森羅萬象、鳥といわずけものといわず、彼等ひとしく待ち受けた王子の生誕に、あらゆるものの涙の集りは、喜びの甘い涙となつて、五色の花の屋根から麻耶夫人の額につたわり、王子の全身にふり

注ぎ、花も鳥も暫しは喜びのうたを止めませんでした。

この壽ぎの中で、麻耶夫人はかの夢の中の蓮のうてなに坐つて抱いたわが子と、今、眼の前にしかと立つたわが子と、何れも尊いその姿に、今更のように胸打たれたのです。夢の中の蝶の言葉にも、はつきりとうなずくことが出來ました。

大きな喜びと大きな悲しみ、輝やかしい喜びの中にひとり身を沈める麻耶夫人の心にも既にみ佛の心が兆しておりました。

× × ×

王子シツダルタはこうして多くの期待のうちに世に出たわけです。そして、その期待にそむかぬ程に王子は母、麻耶夫人にゆめで約束したとおり、報ゆるにはあまりにも大きなみおしえが、露の雨の如く、多くの人々に慈雨となつてもたらされたわけです。

幾日かして麻耶夫人は偉大なるいとし子を眼の前にして、この世を去りました。ルンビニーの苑の感激を胸に秘めながら。

花は笑い、鳥はうたい、五色の花御堂、に注ぐ甘露の水。世の母たちにもなつかしい花まつりももうすぐまいりもす。(おわり)

(隆崇幼稚園教諭)



左より水谷・高瀬・竹中・仁戸田・内山の各氏

春と宗教

—座談會—

早稻田大學教授、文學博士

日本文化放送

仁戸田 六三郎

高瀬 廣居

内山 房子

司會

竹中 信常

竹中 「浄土」と云う雑誌は非常に限られた内側からの雑誌でありまして、從來えてして内側から色々な出筆とか意見はよく云はれましたが、外側の浄土関係以外の方々の本當の意味の雑誌批判と云いますか、そういったもの、或は浄土教信仰の外側からの觀點というものがえてして軽くなつていますが、今日は幸い皆様のお出をいただいて、それを忌憚なく外側からの御意見をお願いしたいと存じます。場所は宗務所で内側であります、最初に今日おみえいただきました早大教授の仁戸田博士は最近、「信仰の論理」で學位を取られ、その出版會にも私お邪魔しました、又前中山文講座での御發表の際にも拜聴させ

ていただきました。

そこで私が浄土の讀者を代表して窺いたいことは先生のおつしやる信仰の論理と申しますか、と理論的論理と云う言葉があるかどうか知りませんが、との違い。本質的な相異と云う事は先生も御著書でおつしやつています。そこで信仰の論理と云うテーマで信仰にはたして論理と云うものがあるかどうか、話にはちよつと堅くなりますが、後程だんだん柔くなると思います、一つ先生にその邊から口火を切つていただきたく存じます。

仁戸田、今、竹中先生より分不相應の紹介をうけ、冷汗三斗の思いが致します。これから勉強しようと思つているがすでに頭におぼ

る月をいたゞき古人の謂く、日暮れてなお道遠しの感いよく深くしている次第であります。然し、これも何かの御縁と思い愚痴はさて置き御詰問にお答えしたいと思ひます。

信仰に論理がありや否やの問題、さすがは竹中先生、心膽を寒からしむるものがあります。私は論理に二様あると思う。信仰の何かを解せぬ人々に信仰をわからせる筋道として、富に自然科学の進んでいる現代、ものの道理を立てて説く論理としてであります。信する人の信仰は當然ですが、信仰を持たぬ人には、信仰を持とうとする人と、信仰に無關心の人との二様があるが、信仰を求める人にも、信仰のない人々にも納得してもらい救いのよろこびを感じてもらふ爲に方便として論理が必要なのであります。もう一つの論理は云うならば、論理ならざる論理で一言以ていえば、「謂く云い難し。」逃げるわけではありませんが、私の宗教哲學で考えてみると、佛法僧の法は各宗各様であり種々解釋はあるが、根本に於てこの三つの相違は歴然としてあるのであります。一方には否定され他方には肯定されている、こゝに論理ならざる論理があると思うのです。起信論に、言説の極みは言説を以てす。とある如くこゝに信仰の論

理の論理は人間の理知を以て押し進めるものではなく、宇宙は恒常不變でこれは人間の理知を以ては計られないのです。しからばそれは何によつて知られるか、そこに信仰があるのです。萬物の生きるいとなみの根源があるのです。

竹中 どうも有難御座居ました。信仰者に二つの類型があり、信じないという事も一つの信仰ですね。そこで本日の御出席者の紅一點の内山さんはそのどちらの型でしようか。

内山 私も以前はキリスト教に教會にも通つて信仰してみようと思つたが、最近では信仰すること自體が分らなくなつてしまつたんです。

竹中 キリスト教は相當長い間ですか。

内山 一、二年位です。それも中學頃ですからセンチからかもしれません。

竹中 信仰は分らなくなつたが、生活感情の中には信仰がありますか。

内山 そうですね。信仰というのは、自身自身の生活自體と思うんです。

(高瀬氏見えらる)

竹中 仁戸田先生の仰言られる信仰の論理という事も一應了解できたのですが、佛教では人間觀の分類が多く特に淨土教では惡人正

機に本質があるのですが、それに關連して、法然上人當時の惡と現代の惡——社會化された惡——とのひらき、惡の内容と外面規定の相違について、又宗教的惡が現代どのような考えられてゐるか。それについていかがでしようか。

仁戸田 全く急所をつかれ、周章狼狽してゐるのですが。然しこれも亦、惡は惡なりで上人の時代の惡も現代の惡も同じだろうと思ふのであります。たゞ、しいて惡の相違を考へてみるならば、マス・ソサイアティの時代には、特に人口の過剰と自然科学の高速の進歩によるミキサ―やト―スターの時代となる、惡の種類もふえては來て居ります。昔では刀一チョウでしたが、今は一コロ、即席成佛。石川さんのいう如く惡は全くつきません(笑聲)。法然上人が人間の惡に着眼された見通しは、私本當に敬服して居ります。たゞ數に於いて惡の増加した時代に、法然上人のお氣持を實行に移す事が何より大切であり必要な事なんです。たとえば、あの時代の上人が罪人として流されたというのは、佛教徒内の斗争と云われるが、現今では佛教以外の争いが激烈となり國土と人口のバランス、思想信仰の種類が非常に増加してゐる、こゝに、

當時の惡との相違した様相があるのであります。これについて如何に對處するかは一に淨土の使命であらねばならぬと思うのです。

竹中 惡が本質的には同じであるが様相が異なるという事、私も同感です。たとえば現代では一コロ、原爆水爆が出て來た。そうするとそこに人間性の價值批判が問題で、その點原爆問題は佛教徒にとつても大問題であります。そこで、高瀬氏にジャーナルの面から佛教徒の平和問題について御意見を伺いたいのです。

高瀬 そうですね。ジャーナリストの立場より宗教家の平和運動を含む社會運動については、餘り見聞きしていませんが、それが報道として見られる場合、私はジャーナリストの立場から、宗教家の發言と民衆の考えていゝる事との間にどれ程の繋りがあるのだからか。ジャーナリストは評論家など集めて展望を語らせる。これはジャーナルの効果なんです。宗教家は一つの生き方としての平和運動もあるがこれを人間として叫ぶのと宗教家として叫ぶのと違つてはいけないと思うんです。平和運動を教團を通じて高める事よりも隣りのおかみさんを通して何故平和を語らないのだろう。その點機能を通じて説かれる事

に非常に疑問をもっているのです。

竹中 全く手痛い處をつかれたのであります。現在の宗教家が組織の個人と生活の個人とのギャップがある。そこに宗教家の社會運動の浮き上りが感じられると思うのです。宗教家は個人の生活の實踐から出發するという事になると、吾々の淨土教の生活實踐は念佛であります。然らば、念佛を現代人は如何に考えるか、又現代人の念佛實踐がどのやうに受取られていくべきかという事になります。念佛をどうお考えでしょうか。

仁戸田 宗乘學より云うと、非常に煩瑣になるので、高瀬さんの云われた庶民という感情からいうと、不謹慎かもしれませんが、どこか浮き上つている感じが致します。ネオンかややく近代にはキャッチフレイズにもならない。それは、上人がその當時エポック的な念佛を唱えられたのではあるが、幾ら良き香りのお茶でも、二番三番煎じではきかなくなると同じ理だと思ふのです。時代が變つても人間の本性は變らぬのであるから新しい感覺のもとに淨土の皆さんによつてリバイバルして欲しいという切なる感情をもつて居ります。

竹中 高瀬さん如何でしょうか。

高瀬 念佛という意味はよく分らないが、私は偶々友人の母が亡くなつてお經を讀んだ時の氣持ちから云つて、念佛は、一つは懺悔

だと思ふ。もう一つは上人が云われた衣帽子をきざるところなしという民衆性だと思うのです。この二つが念佛の根幹だと考えているんです。

竹中 内山さん、教會での御經驗は。

内山 何ですか、身近かに感じられないんです。私自身でもそういうものを求めてみたい氣持ちはあるのですが。

竹中 佛を念ずることに對しての御感想は

内山 馬鹿らしいとは云い切れないと思うんですけれど。

高瀬 大體、竹中先生の云われる質問自體がおかしいと思うんです。外側から念佛を觀る事がおかしい。教會にあつて敬虔に膝まづいている姿を外からみる事は有り得ないと思うんです。人が佛前で念佛を唱えて居る姿、それがアーメンであろうと何であろうと客觀的にみられる事はないだろうし、それを批判する事自體おかしいと思いますね。

竹中 いや全く、外側から觀ようと内側から眺めようとそんな事は實際は無用の事でありまして、信仰という面では誰が念佛を唱え

ようが、アーメンを唱えようが、本質的には同じであります。今、念佛に對するお考えを伺つたのでありますが、然らば自分自身どうかと云う事になりますが、それは何れ淨土誌上で説明させていたゞく事に致します。

處でこの念佛という事は、仁戸田先生もその學位論文で取り上げて居られが、佛の絶對の愛、誓願を基調として存在するのであります。そこで、佛の愛ですがこの愛はやがて愛情の問題になつてくると思うのですが、幸い先生の愛に關する三部作即ち、愛情と人生、愛の哲學、愛に生きるがあり、編集部若い連中が刻苦勉勵して讀んで居ります。就いては先生に作者としての御感想を。

仁戸田 それはお門違いでしょう。無意味ですよ。

竹中 その意義は重且つ大ですよ。

仁戸田 古今を問わず、司會者の命には絶對服従すべき鐵則がありますので一言申し上げますならば、佛教では慈悲、彌陀の本願——四十八願の何れにアクセントを置くかそれには問題があるが、キリスト教にもアガペー(愛)、カリタス等があり、生れながらの自然發生的な愛をのり超えてゆく大愛という事については洋の東西を問わず宗教という事で一致して

いる。この立場よりして、この潤いのないという聲をしぼ／＼耳にする現代の社會に、利害、打算、損失、取らぬ狸の皮算用その他、何が美しいか、何が善であるか、何が正しいか、そう考える前に得手して損得を考える現代に、憤りを感じているのであります。その昔、法然上人はじめ偉大なる宗教家達が、身を犠牲にして獻身された姿は絶大なる愛の氣持に外かならぬと思うのですよ。そこで駄文をものして世に訴えたのであるが、その微意をお汲取り下されてお手軟かに、否お口軟かに御批判賜り度く存じます。

竹中 何故三部作を取り上げたかというと、仁戸田先生の仰言る通り、餘りにも現代の社會にも、人の心にも潤いが無い。これからの若い者が戀愛するなら斯くあるべきだと言われている。若き人々には心すべき事と思ひ取り上げたのです。

仁戸田 私はあの中には書かなかつたが、佛教の長い歴史の中に盡きざる泉の如くに流れているものは、位人身を窮めた釋迦如來が幸福な生活を捨て去られたという事、それは人類に對する深い愛に外ならない。そのころを秘めて寛大なる氣持ちに狎させてもらつて申上げたのであるが、よきなに御汲み取り

下さいますよう。

高瀬 私は、愛という言葉は佛教からは感じられませんね。それは佛教は慈悲だからです。仁戸田先生がアガペー、エロスと云われたが、先生の考えて居られる愛は、佛教的な愛究極的に於いて云われるでしょうが、やはり先生の云われる愛はギリシャのエロスだろ うと思うんです。そうでないという事も考えられようが、ギリシャのエロスという事に寧ろ學生の氣持をかきたゞせる魅力があつたわけですから。佛教は本質的には愛を否定しているものだと思うんです。愛はエゴイズムですよ。人を愛し女性を愛すものはギリシャのエロスなんです。性的なものを考えずしてそれは考えられず、性欲の消化した愛しか僕には考えられませんね。ドストエフスキーが、抽象的な人類を愛する事は出来るが、隣人は愛せないといふ、愛を二つに分けている。佛教の愛はもつとむごいものです。痛烈な自己鍛練ではないかと思ひますね。

竹中 かつての仁戸田先生の弟子である高瀬氏が、御師匠の先生に對して愛はエロスであつて、佛教は愛に反するものであると明解な論斷を下されたが、それに對し仁戸田先生の古典哲學に對する立場から、又、先生の人

問性から發して三部作を書かれた氣持から、どうぞ一言。

仁戸田 小生餘りにも發言致しました事は座談會のエチケットに反すると思つていますが、およそ生きるといふ事は罪を犯している事と思つて居ますので一言申す事を許していただきますならば、佛教がギリシヤのエロスを、日本語で云うならばスイタホレタという事です。これを否定するかどうかと云う事、これに對しいさゝか言葉をかえしますが、我流な解釋がある。涅槃經の中に一切衆生悉有佛性とあり、又、色即是空という事がある。大乘佛教に於てはスイタホレタも佛教であると思うんですよ。竹中先生はじめ名僧智識より御叱正されるのではないかと思います、つまりスイタホレタの中じやないか、あの荻生徂徠が曾根崎心中を讀んだかどうか知りませんが、彼は増上寺のゆかりの地で實在を揺すぶられたという。曾根崎心中に心動かされたこと云う事は寂滅已樂と響くなりというところ。間違であれば御詫び致します。

高瀬 仁戸田先生が今曾根崎心中云々と云われたが、愛に佛教があるという事柄は愛を考ふる立場で違つてくると云つてゐるのじやないんです。愛は個人差があつて對處高處あ

ると解釋する事がおかしいし、よく僕には分らないんですが。

仁戸田 高瀬さんの云われる事最もであるが、私はザツクバランに云うならば、男で女の人にほれられないのは失格であるし、女の人が男の人に好かれられないのも失格である。これを佛教が否定しているかどうか、そういうものが考證學的にどの程度の正確さがあるか分りませんが、佛教經典を繙いてみると、釋尊の若き日の生活行狀は眞偽の程は別として相當肉體文學的である、それを大藏經典の中に取り入れているという事は色々問題があると思うのですが、愛想づかしという事が佛教に於いて自然發生的な所謂エロスを否定し、非人間的なアガベ、カリタスを否定し、佛教が慈悲を強調し、人間本來のエロスを否定してゐると云う事は佛教に於いて心外だと思ふんです。佛教信者及僧籍に連なるものとして、オ、ミステイクじやないかと思うんですよ。

初雪や降りこめられて向島、二人が中に置き炬燵、こんな感情も佛教の慈悲の中に含まれると思ひますね。

私は實證的に申上げるが、さつきの心中について社會學的には問題があるが、あの心中

にはあの鐘が出て來ねばならないんです。

竹中 南無阿彌陀佛 とね。

仁戸田 天に在しますわれ等の神よでも何でもないんです。現代のチャチャの時代、マソボイタリヤーノ、マソボスタイルのお嬢さん方にいさん、トレアドルパンツのお嬢さん方の時代でも若き人々の心中は斷えない。時代が進んでゐるのに心中は依然として斷えない、そこに宗教の問題があると思うんです。それはそこにアンダカーレントがある。それは新聞の社會部はスミの方にちよい／＼と圍みで入れる。これは餘り外國ではない事です。法律學的に云々するような者にや心中する氣持なんぞ分りやしませんよ。

高瀬 やはり、先生が最初の出發點にしている愛はエロスだと思ひますね。

仁戸田 極むる處、愛する人だけを愛するか、それを全人類を愛するかと云う事が問題なんですよ。愛をアウヘーベン、するかしないかと云う所に宗教的天才ともなれるかなれないかと云う事になるんですよ。

高瀬 私はね、佛教は極めて無慈悲なかたちで云われていると思ひますね。

仁戸田 キリストは女の人に好かれたんだよ。

竹中 仁戸田先生の仰言る事も、高瀬さんの云われる事も夫々の立場であるが、そういう問題を男性だけが色々云つてもはじまらないで、女性の聲として内山さんいかがでしょうか。

内山 宗教的愛は、人間として感ずる感情と本質的には同じであつてもやはり違うものじやないんでしょうか。

竹中 内山さんが現代娘のXを讀まれて、現代の女性がこれに關してあれからうけた感じ、淨土の讀者を代表して愛情、戀愛について吾々の論議を前提としてどうお考えになりますか。

内山 この本に書かれている事は、一方的な見方であると思うんです。この娘は私達より下の時代の連中だと思いますね。

竹中 私の推測する處、仁戸田先生の著作の中一番アツピールし、先生が原稿料を最も稼せがれたと思うんですが……。

仁戸田 あれで雨もりを防いだんですよ。

(笑聲)

竹中 それに伊藤整氏の女性に關する十二章は讀者は何かと云えば、女性ではなくて男性だつたという。現代娘のXもやはり女性よりミョウレイの男性の方だろうと思います。

いかゞでしよう。内山さん、裏側の女性の立場よりみていたゞけたら。

また、一方的とは、本質的に突きつめられたという意味ですか。

内山 そういう意味も有りましようが、果してあゝ云う考え方だけで行動しているかどうかという事です。

竹中 實は家内の讀後感を聞いてみると、こういつた娘は中流以上の娘でもつとその下に、そういつた事につきつめられた娘さんがあるわけじやないか、あのように考える事の出来る娘さん方は幸福ですねと云つていた。これは家内の感想ですよ。

仁戸田 中流以下については若干のデータがあるんですがね。

高瀬 愛を否定して慈悲があるという事、僕自身非常に動物的な男ですから性欲を考えない戀愛は考えられないんです。それを僕は女性の前ではつきり云いますよ。こゝには驅引があるわけだ。これがかえつて魅惑する事も可能なわけです。僕は自分の中にあるそれを認めている。認めていると佛教はけとぼして呉れた方がいゝんですよ。佛教はもつと嚴肅な壯烈なものだと思ふんです。

内山 そうなると愛の言葉の定義が問題だ

と思うんです。高瀬さんは、キリストに愛はあつても不思議とお思ひにならないでしようが、慈悲は否定なさるのでしよう。

高瀬 そうです。逆に佛教の説く慈悲は理解できても愛は否定しますよ。

竹中 この愛情の問題は人間の根本問題であり、又宗教の根本的な問題でもあつて容易に論じ盡されるものではありませんのでこの邊で御遠慮申上げたいと思います。

最後にまあ結論的になるわけですが、先程仁戸田先生が俺の講義はマス、コミだと言われて居られました。最近の大學等の入試も數の上では大變のマスになつて來ています。

そこで、講義のマス、コミは結構ですが、靜かに少數での研究室での講義と大講堂でマイクを使用しての傳え方、いやしくも宗教學者としての立場から宗教を語る事についてそれが個人的に傳えるべきか、又マス、コミで講ぜらるべきか體驗上より先生に御伺いしたいと思うのですが。

仁戸田 竹中先生よりの機微にふれた御質問ですが、話は今夕の最初に戻りますが、上人の選擇集や和語燈錄の御言葉を思いながら申上げるのですが隨機說法という事でありマス、コミの場合と少數の學生のゼミナ

ールの場合とおのずから機を異にするのじやないでござんせんか。信仰を求めざる人、求めて與えられざる人、これは攝取不捨でいくより仕方がないですよ。その場合おのずから趣きを異にする。體驗から申上げて、キリストじやないがパンを求めて石を與える事は、この世に生をうける吾々として心苦しい事です。パンを求めるものにはパンを與え、イタチョコを求めるものにはハーシエーでも森永でも與えねばならない。これが宗教家の立場じやござんせんか。落れば同じ谷川の水、同じ高根の月を見るかな、けだしエロスも又アガペーに、否定されたごとくみえる佛教の慈悲も云わず語らず心と心、すいたほれたの中も見ない振りをしながら、十二因縁を超えて龍樹の佛教哲學じやござんせんが行く處の涅槃の世界という事になるじやござんせんか。涅槃といえばあの増上寺の涅槃門を何回とくぐつた事でしようか。

それはそうと、先日バスガールの會合に出席したんですがね、その時バスガールが云うには、バスに乗つていてアベックぐらい不快なものはないと云うんです。相手だけには親切で、他の人には非常に不親切なのと云うんです。僕が、あなた好きな人いないんじやな

い、といつたら、とんでもハッパン、ボーイフレンドぐらい居ますよと云つてました。別にインフェリオリティ、コンプレックスが云つたのじやないんですがね。お互に愛し合うもののみの愛は、せまい愛である。非常に心打たれましたね。佛教の慈悲、これは深い廣い愛に外ならなと思うんです。そしてそれを培うものは念佛ですよ。

竹中 マス、コミからバスガール、バスも公共的な乗ものですからこれ又マス、コミに入りますが、こゝで、長年宗教放送をして居られる高瀬さんは、泌くとマス、コミについては考えて居られる事だろうと思うので一言伺わせて下さい。

高瀬 宗教家とマス、コミニュケーションについて感じます事は、第一話術が下手という事、友松氏が第一人者という事になつてはいるが、そう云つては甚だ失禮だが岸本、増谷兩先生など餘りお上手とは云えない。ラジオの性能を理解出来ていないです。かつてマス、コミというテーマで書いた事があるがマス、コミの持つてゐる特質と宗教の特質とは相反するのじやないかと思うんです。それは、マス、コミとパーソナリティの問題とも云えるんです。宗教はあくまで個の問題であ

つて、神と人、佛と人との對決だと思ふんです。マス、コミニュケーションは人間を一律に對處するものです。マス、コミの場合は高校一年を對象としてものを考えねばならぬ、それが吾々放送擔當者に最初に與えられた課題であつた。それについて、先づ氣にかゝる事は、佛典講話、花まつり等、について放送する場合の言葉の内容のむづかしさという事と、それを平易にするのに餘りにも時間がかゝる事、各々寺院や教會では平易には説かれてゐるのであるが、一段と高所に立つて、出来るだけ卑俗な事はさけて語つてゐるという事です。これはマス、コミのもつ責任もあるが、何より宗教放送者の民衆性の缺如だと思ふんです。又宗教家という名前を冠せられない宗教學者の發言は文化人の發言と何ら變るところがないんですね。ニコヨンのおばさんが云うのには、文化人の云う事は高い處からものを云つてゐるので理解出来ないという聲と、あんなえらい人の言葉を聞く事が出来るのはありがたいという聲を聞くのです。そういう人達は同じ基盤の上に立つてゐるのかも知れませんが……

仁戸田 僕は共通の廣場という意味で云つてゐるんだよ。

高瀬 やはり宗教とマス、コミは絶対に両立するものじゃないと思うんです。宗教がマス、コミに出る場合は、僧侶が職業的意識をもった場合そういう事になるんですよ。

竹中 マス、コミと宗教とが相い入れないという事ですね。しかし豫期してマイクの前に立つていっている事は、現在宗教々團自體が單的にみられるような傾向になつていていると思います。その場合、相互交渉がなければならず、流す方だけ流しても、受ける方はどうか、内山さんいかがですか。

内山 その放送を一生懸命になつて聞く人もあるでしょうし、漠然と聞く人も色々あると思うんです。中には求めて聞く人もあるんだから意義があるんじゃないかなという氣が致します。

竹中 放送自體の價值と聞かれた場合の價值との信仰的バロメーターはどうでしょう。

内山 寧ろ逆になるのじゃないでしょう。か。なにか賣り込もう、さらつて行こうと一生懸命になつていっているといった感じがしますね。

竹中 それは高瀬さんの結論にもなるわけだが、なお且つ宗教放送のあるのは何故だろうか。

高瀬 宗教放送のあるのはアメリカのサゼーションにより作られたのではあるが、宗教の時間があるという事柄は必要だと思うんです。根本的におかしく思うのは、宗教家としての發言なのか、文化人としての、文化現象の一コマとしての發言なのか、名前をあげて失禮だが、宮城音彌とか大宅壯一らのと宗教の時間との場合の發言の差があつてもよいのにその異なりを感じないところに宗教放送者のでたらめさがあるんですよ。僕など淨土宗だけしか知らないが、しかし淨土宗の方だけ選ぶという事は派バツを激しくする事になる。いやでも他家の人を頼むわけだが、しかし人柄を知らない。そこに非常な自己矛盾を激しく感ずるわけだが、この自己矛盾の上にあぐらをかいているのが宗教放送者という事にもなるうと思うんです。

竹中 今日は大變忙しいのに有難う御座居ました。内容的には多彩ではあるが、現代娘のXを宗教人のXと置き換えてのXの解析が出来たわけですが今日はこの邊で閉ぢたいと思います。

(おはり)

俳壇

高知 竹原敦圓

前便りありし遍路の姿見ゆ

道連れの別れに受けし遍路札

結界は地鎖式中花の寺

本山の祖廟の松に登る蟻

蟻這ふといふといへども良い氣節

蟻登る華頂祖廟の松涼し

猿柿の芽にあますなく花もてる

犬吠ゆる木の末猫柿の花

漫 漫 的 ・ 快 快 的

——中國花祭閑話——



安 居 香 山

のんびりとした春の日、れんげ草や、菜の花に飾られた田舎寺の花御堂にたむろして、甘茶を濯いだり、飲んだりした花祭りの行事は、お伽噺的な佛降誕の物語と共に、子供達の夢を無限の世界に遊ばせてくれた懐かしい思い出である。

五香水 佛の臍を見つけたら 麥光

などと、大人達までが詩情に無垢な笑いをかもし出すのも、花祭なるが故であらう。

閑話休題

「まったり漫漫的」とは、その語調の如く如何にもものんびりとした状態を言う。春日、野良でどつかり座り込んだ牛が、動かすともなく下顎を左右に移動させて反芻する様など、まさにこの状態であらうか。

しかし私には、「漫漫的」と言えば、中國人の行動を表現する語として強く印象づけられて居る。話によると、朝の散歩に鳥籠をぶらさげながら、長いきせるでタバコをくゆらせ、いとも悠長に歩いて居ると言う。果てしない大陸と共に、いかにも「漫漫的」である。が、これは一昔前の中國である。革命の嵐は忽ちに中國全土を一新し、機械は唸り、勤勞歌が謳はれ、國民服一色の人々が忙しげに往來して居る今日、こんな「漫漫的」はないであらう。一轉して「快快的」となつた。先進國を以て認じて居たわが國より、一足先に社會主義社會を築いてしまつたとは、何と「快快的」なことであらうか。

この中國が、永い佛教の歴史を持つて居る事は、今更言うまでもない。そして今尙それはある。大きな社會變革の中にも、絶えるこ

となく嚴然とある。花祭閑話から、こんな所にも進めて書いてみよう。

○ 中國に佛教が傳來したのは、一般に後漢明帝、永平十年（西化六四年）とされ、この時攝摩騰・竺法蘭等が、四十二章經をもたらし、洛陽に來たと言はれる。しかし、實際にはもつと早く來て居た様で、魏略西戎傳には、前漢哀帝元壽元年（西化前二年）に、大月支からの使者伊存なる者から浮屠經を受けた事が記されて居る。浮屠經とは言うまでもなく佛教のことである。そして、この記録等は、佛教傳來説の確かなものである點よりして、こうした正史にのらぬ傳來の事實も、相當あるのではないかと想像される。

所で、この魏略西戎傳の、上掲元壽年間の記載の少し前の所に、浮屠經にはこんな事が記してあると、僅か五十字程の紹介がある。その中に、

國王浮屠を生む。浮屠は太子なり。父は屑頭邪（淨飲王のこと）と曰ひ、母は莫邪（摩耶夫人のこと）と云う。莫邪、白象を夢みて孕む。生ずるに及び、母の左脇より出生し、地に墮ちて、能く七歩を行く。

これは別に事新らしい記録ではなく、釋尊降誕の聞きなれた話であるが、未だ佛教が來たばかりの時代に、佛經の説としてこの物語が紹介されて居る事は注目すべき事であらう。偉大な釋尊の降誕の奇瑞が、早くも中國人にこの様に傳へられて居るのである。何の氣なしに魏の屈志を見ていた私は、聊か驚いた。中國人への佛教の印象は、こうした不可思議な釋尊降誕の理解から始まつたのであらう。

か。

○ 灌佛會に關する古い記録では高僧傳卷九の佛圖澄傳に石動なる者が毎年四月八日に寺に詣で灌佛し、兒の爲に發願したとされて居る。これは東晉成帝時（西化三三〇年頃）の事で、相當古くより灌佛の事が行はれて居たことが知られる。

又梁高僧傳では、灌佛會を年例としたと言う記録があり、これは石動と同時代の後趙の事である。

有名な年中行事記に荆楚歲時記と言うのがあつた。これは宗懔に依つて作られたもので、主に湖南、湖北を中心とした揚子江中流域附近の年中行事記であるが、こうした種類のものでは、貴重な記録である。宗懔は北周武帝の保定年間（A.D. 五六一—五六四）とされるから、前掲の石動よりは二百年程後の人である。

これには次の様な事が記されて居る。

四月八日、諸寺、齋さいを設け、五色の香水を以て浴佛し、共に龍華りゅうわの會かいを作し、以て彌勒みれの像と爲す、而して長沙寺の閣下に九子母神（鬼子母神のこと）あり、是の日、市肆しじの人、子なき者、薄餅を供養し、以て子を乞ふ、往々にして驗あり。

（校注荆楚歲時記 守屋美都雄著）

これに依ると、中國では六世紀頃、盛んに灌佛會が行はれて居た様である。今と一寸變つて居るのは、甘茶でなしに、五色の香水を灌いで居ることである。五色とは言ふまでもなく、青・黄・赤・白・黒であるが、これには夫々、それ相應の香材があつたと見え、この

記録にも、高僧傳を引いて示して居る。即ち、都梁香（青色）鬱金香（赤色）丘隆香（白色）附子香（黄色）安息香（黒色）がそれである。考へてみれば、誠に華やかなものであつたであらう。甘茶でごまかしては申し譯けないのかも知れない。先に掲げた俳句の五香水も、これで分るであらう。

「龍華の會」とは、彌勒菩薩成道の時、龍華樹下で行はれる説法の會座である。言うまでもなく彌勒は、佛滅後五十六億七千萬年にあらはれる後佛と言はれるものであるが、釋尊の在世に會えなかつた末法の者は、せめて彌勒の會座に得道すべしとされて居るのである。灌佛會のとき、それになぞらえて法要としたのであらう。

さて最も面白いのは、この日に、子をさずかる爲、九子を一度に生んだと言う鬼子母神に、薄餅を供養して、願をかけると言うことである。釋尊降誕にあやかつての願いであらう。「往々にして驗あり」と言うのであるから、どうやら絶對的な効驗はなかつた様である。それでも、たまに効驗あつて、玉の様な子を授かれば、釋尊の再臨かとも喜んだ事であらう。何處にもある人情の常である。

快快的。一足飛びに清代に來てみよう。

清代のものでは、燕京歲時記と言ひ、敦崇なる者が光緒年間に書いて居る。岩波文庫では北京年中行事記とされて居る。これには、灌佛についてはないが、それに關聯した「捨緣豆」のことが出て居る。

四月八日都人の善緣を好む者は、赤豆や大豆を數千取り、佛號を念じ乍ら拈む。拈み畢つて煮熟し、それを市人に頒與へる。これを捨緣豆と謂ふ。これにより豫め來世の緣を結ぶのである。

謹んで「日下舊聞考」を見るに、

京師では僧侶の佛號を念誦する者は、輒ち豆を以つて數を記し、四月八日の佛の誕生の辰に至つて、其豆を煮、微しく塩を加へて味をつけ、人々を路に廻へて、食べる様にすゝめ、以つて結緣をする。

とある。今尚、其舊慣に沿ふのである。

（岩波文庫本より）

灌佛の行事は分らぬが、當時北京では、釋尊降誕にちなんで、四月八日に豆で佛緣を結んだ事が知られる。甘茶が豆になつてしまつたことは、全く驚き入る次第である。勿論甘茶もあつたのかも知れぬ。

○

一轉。話は現代に及ぶ。中共に佛教がある事は、その様相の變化は別として、嚴然たる事實である。去年の八月には、佛教協會副會長の趙樸初氏も來て居り、同協會發行の月刊誌「現代佛學」も、毎月、私の手元に送られて來て居る。無神論であるべき共產社會に、どうして佛教が存在し得るのであらうかと言うことは、單なる常識の論から來る疑問である。理實に存在して居るとすれば、どんな形で存在しているか、寧ろ問題である。この事は、「現代佛學」を一寸見れば分ることであるが、こゝでは、聊か本題とずれるから又別の機會にしたい。たゞ言える事は、先程、常識論から來る疑問であると言つたが、その疑問に答えるかの様に、大いに中國の佛教徒は苦心慘憺していると言うことである。何故ならば、今や死活の竿頭に居るからである。

この中國で、どの様な降誕會が行はれて居るか、それらしいもの

を寡聞にして知らない。しかし、まさか無神論の國で自分の降誕祭をやつてもらうとは、釋尊自身も知らなかつたであらう。

しかし、これは逆の論かも知れない。何故ならば、「人民の爲」に活躍しつゞける中國の佛教徒は次の様に號呼するかも知れぬからだ。

「本當の佛教は、その教義も實踐も、社會主義や共產主義と全く軌を一にするものである。そして、中共に於てこそ、本當の降誕會が行はれ得るのである」

と。そして、更に次の如く附加するかも知れない。

「日本の佛教徒は怠惰である」

と。

どちらの言い分が正しいかは、釋尊と歴史に聞くことゝしよう。

○

一九五五年十一月、中共から出版されている「古代笑話選」には百餘の短首が載せられている。この本がどの程度通行して居るのか分明でないが、中に佛教に關聯したものもある。次にその二つを翻譯し、こんなものが今語られていることを示し何等かの判斷の資料とし、更にはこの閑話の結びとしたい。

第一話 輪廻報應

或る人が大いに輪廻報應の道理を談じ、殺生してはならぬと説いて居た。若し今世で牛を殺せば、來世では牛となり、豚を殺せば豚となる。一匹の蟻を殺しても同様であると。

或る人が、

「それでは人を殺すのが一番よいですね」

皆の者は不思議に思い

「どうしてです」

と尋ねた所が、

「そりや、來世では少くとも人になることが出来るからさ」と。

第二話 三藏法師よりましだ

老人は非常に酒がすきであつた。或る日、酒に酔つて大變嘔吐した。友達がこつそりと彼の吐いたものの中に豚の臓物をほり込んで置き、それを指さして、

「人は皆五臓を持つて居る。御覽なさい。今あなたは、餘り酒をのみ過ぎて、一臓を出してしまつた。おそらく生きられまい」と。その老人は一寸見て、何事もなかつた様な顔つきで、

「唐の三藏法師（藏と臓は同音）でさえ生きていたんじやないですか。私には未だ四臓あるから、恐るゝに足りませんよ」と。

（幡隨院住職、教育大學）

×

×

×

×

佛 教 入 門 (その六)



心 性 の 問 題

—— 凡 夫 心 と 佛 智 ——

佐 藤 密 雄

(一)

先きに述べた様に、佛教では、現在の日常の生活をさせて居る認識判断の働きは、眼識・耳識・鼻識・舌識・身識の前五識と言はれるものと第六意識と言はるるものとの六識で説明する。事物を見て色や音や香等を識るのが眼識等の前五識で、これで知られた色や音や香等を綜合して、例えば「りんごである」とか「それを喰べやう」とかと認識判断するのが第六の意識である。

生存の爲めの意識活動はこの眼識等の六識で行はれて居ると見て良いのであるが、此六識は、迷ひの生活の爲めの

意識活動をして居るのであつて決して悟りの生活の意識活動をして居るのではない。此は六識を迷はせて居るものがあるからである。即ち六識の背後にあつて、六識の認識判断をして人間的Ⅱ自我的Ⅱならしめる様に支配する第七の識なる自我意識があるからである。此の第七識を末那識(まなしき)と言ふのであるが、此の識は、強く自我を内感して、六識の活動を自我的な認識判断にならしめる様に支配して居るのである。人間には本能的に自己を主張しすべてのものを自己の好悪損益に基づいて認識し、利己的な判断決定をなそうとするものがあるが、かゝることをなさしめる實體こそがまさしく此の第七の識たる末那識である。

六識の中の前五識である眼識・耳識・鼻識・舌識・身識は見聞する客觀の色彩や音響や香ひ等をそのまゝ識り寫すもので、此に對して第六の意識は此の識り寫された客觀の色彩等を判斷して主觀的に觀念する働きである。其處で、前五識の客觀と第六意識の主觀との結合交渉こそが意識的生存活動であり、我々の日常生活であることになるが、此の生存活動を人間的・自我的になして居るのが第七の末那識であることになる。故に眼等の前五識と第六の意識と第七の末那識との七種の識の活動で、人間的生の各刹那が構成されて居ることになる。

譬へば、ばらの花を見て好ましく思ふのも、他人のばらを盗み取るに至るのも、前五識の見聞等を第六識が判斷した結果であるが、此等の六種の識の働きを支配してその判斷を自己に「好ましい」とし、更に「盗み取ろう」とするやうな利己的な判斷に傾向づけたものは第七末那識である。

此の様に、七種の識に依て日常の經驗や生活が成り立つて居るのであるが、その時々々の經驗や判斷が、例へば午前中に見聞したことを午後吟味し、昨日の判斷實行したことに今日責任を取つたりするやうに、自己の一連の人格上のものとして連續して見られるのは何故であるかと言ふと、これは、七種の識の背後に更に、此等の識をして經驗判斷をなさしめて居る根本識とも諸識の母體とも人間心と

言ふべき、人各々の人格態の流が存するからである。

此の根本識とも言ふべきものを第八識の阿賴耶識と名づける。先きに述べた、第七識たる末那識が自我意識として自我を内感するのは、此の根本識がその根底に在るからである。即ち、自我意識に自我とせられるのが此の阿賴耶識である。

(二)

人生は長夜の夢と言はれる。夢の世界では美しき山河も良き友人も夢心のうつし出したものであり、此を夢心が現じた眼等の五識が識り、第六意識が第七識の支配を受けつゝ利己的に判斷して夢中の生存活動を現じて居る。即ち夢の世界の山河大地肉體等の事物肉體も此を意識判斷する眼識から末那識に至る七種の識もすべて夢心が維持相續して居るのである。此の夢心に相當して考へられるのが第八阿賴耶識である。夢心が自己の藏する種々な印象記憶を種子(しゆうじ)として夢の世界を現象せしめ、又夢中の種々な經驗から新たな夢の現象を次々と發展させつゝ、夢の生存界を相續維持して行く常態は、そのまゝ、阿賴耶識の七轉八識互爲因果(しちてんはつしきごいんが)と言はれ行相である。

七轉八識互爲因果の七轉とは、生活經驗をなす眼識から末那識に至る七識で、此の七識が第八の阿賴耶識上に轉起

して夢の生活に比すべき生活経験をなして、其経験を第八阿頼耶識に印象づけ、阿頼耶識はその印象に依つて又新たに七識の生活経験を重ねて行くのであつて、此のやうに阿頼耶識と阿頼耶識から轉起して阿頼耶識に維持されて居る七識の生活経験とが、互に因果となり合つて生存的相續のあるのを七轉八識互爲因果と言ふのである。

人間生存を各自の主觀的觀念の立場から見れば、自己の肉體も自己の住む家も父母もすべて自己流に觀念し、自心が意味づけ、自分のゑがいたものである。自分のゑがいた中に自分が認識判斷をして生きて居るのである。だから自心が夢見る夢の世界の生活に外ならぬと言へるし、人世長夜の夢と形容することも正しいと言へる。又先きに述べた譬へで言へば、恐怖心が繩上に蛇相を幻影して其を恐れ逃げ走ること例へられること正しい。

此の様に、現在の生存の一切を、人間心のゑがき出した夢幻の世界と見るのを、唯心の見方と言ふのである。唯心の見方は、言ふ迄もなく、人間が客觀事物を自己と別なる實在として執着するのを打破する爲めに、一切は唯心所造であるとか、唯識所變であるとかと觀念せしめ、自己の執着する對象物たる美人好品もすべて自心のゑがく妄想にすぎず、無實體のもので、唯識無境と述べる。これは勿論對象への執着心を破る爲めの觀念修練の爲めのものであるが、此の様な場合に唯識とか唯心とか言はれる識と心は勿

論、彼の夢心に比べられる阿頼耶識のことである。又佛教の學問に唯識學とあるのは此の阿頼耶識を研究開明する學である。

(三)

佛教の世界觀は、現實の人間の生存を誤れるものとして否定して、佛教で言ふ悟りの世界なる理想的生存へ進ませやうとする。即ち此岸と彼岸の二重の生存ありとして、此岸から彼岸への當爲を説くのである。一般の哲學倫理學等が、此岸即ち人間の生存のみを眞實として、その眞實性若しくはあるべき状態を追求するのとは異なるのである。従つて、佛教の考へ方は如何なる場合にも、現實を否定することから初まる。尤も、其の否定の仕方は必ずしも一樣でなく、人間が捉へて居る客觀を否定する場合もあれば、客觀を捉へる主觀を否定する場合もある。

唯識所變と説く立場では、現實の人間の生存は繩上に妄想した蛇相に怖れて逃げ走るときであり。夢中の生存に等しきものであつて、眞實の開顯は現實の消え去つた時に顯はれと見る。夢が消えて目ざめた世界を見る如きであるとする。そして、否定される誤りの現實から肯定される眞實の彼岸への、轉換の實踐的つながりは、夢見る心は目ざめる心でもあることにある。夢を見たり眞實を見たりするのは心の働き具舍に依るのであるが、働きの如何にかゝはら

す、心性(しんしやう)は不變である。夢見る働きをなして居る、人間心即ち阿頼耶識も、その心性から言えば、目ざむれば悟りの世界を見、佛智の働きをなす性質のものである。即ち迷へば凡夫的生存界を現じ、悟れば佛界を現するのであつて、此のことを、凡夫的生存をなして居る立場から言へば、迷へる衆生の心もその心性は佛性であり眞如であると言ひ得ることとなるのである。

(四)

佛教的に言へば、凡夫的生存を現する迷ひの心とは、感覺的感情的な欲心や嫉み等の煩惱(ぼんのう)と言はるゝものに依て、けがれた心であつて、此の煩惱を、その煩惱の捉はれを否定し、世界は唯心所變に外ならないと觀念することとで淨めるのであるが、完全に淨められた心が佛智である。心の汚れである煩惱の淨められることは、迷ひの凡夫的生存の夢が解消し行くことである。世上の夢には、夢が消えても夢なき熟すいがあることもあるが、悟りへの實踐では夢の消えることが悟りである。煩惱の根本は無明であると言はれる。無明は無知の意味であるが、然し無知と言ふ實在が存するのではない。無明はくらさ、即ち暗(やみ)の如きであつて、佛智の光がさせば消えるものである。暗が消えれば、それが悟りの世界である。

其處で、夢見る心の人間心が淨められて目さめた心の佛

智になるのを轉識得智(てんじきとくち)と名づけるのである。人間心、即ち人世長夜の夢を現する第八阿頼耶識は自身の上に眼識等の前五識と第六意識と第七末那識の七種識を轉變させて、長夜の夢なる凡夫的生存を現じて居るのであるが、此等の八識の働きが順次に佛智の働きに轉化するのが轉識得智である。

佛智の働きは四種に分けられる。妙觀察智(みようかんざつち)と成所作智(じようしよさち)と平等性智(びようどうしようち)と大圓鏡智(だいえんきようち)とである。

そして、人間が修道に依て自心を淨めて悟りを得る時には先づ、その人の眼識等の前五識が妙觀察智と轉じ、第六意識が成所作智となり、第七末那識が平等性智となり、最後に人間心そのものたる阿頼耶識が大圓鏡智に變るのである。

眼識等の五識は元來色や香ひや感覺を識知する働きであつて、人間は此の識知を好惡等の感情等に依つて歪曲して受取るのであるが、此のことのなくなつて、正しい觀察識智がなされるに至つたのが妙觀察智であるとすべきである。然し此は妙觀察の文字についての消極的理解であつて佛智となれば如何なる場合にも利他救済を本質とするものである。智として正しく觀察するとは、救ふべき人々の適性を正しく觀察し、その適性に應じた施設をし、淨土を現じ得る能力あるものである。

第六の意識は、眼識や耳識等が見聞した所の色や形や香り等を綜合して、構成して、「人である」とか「机である」とかと判斷するものである。即ち見聞した色や形や香りで對象を組立て、それが何物かを明らかにするものであるから、所謂「成所作」の働きをなすもので、佛智に轉じて成所作智と言はれるのは尤もなことと言へる。又此の成所作智は、佛の働きの對象となる凡夫の實際を明に知り、凡夫への救ひを成所作する働きの智である。第七末那識は、しばしば述べた様に、自我意識である。すべてのことについて、他と區別された自我の爲めに諸識に働かけて、自我の爲めになる様に不公平な認識判斷をなさしめるもので、煩惱の根元とも言ふべきものであるが、此の識が淨められると平等性智になるのである。文字通りに理解すれば、自我意識が自他平等の意識に變るのである。平等と言つても佛智としての平等性智は既に自他の區別がないのであつて、たゞ佛智の救ひの對象となる諸多の他のみがあるのである。そしてその諸他を一樣に攝しやうとする意味の平等である。

最後に第八阿賴耶識は、その人の生存世界を維持相續するものである。あたかも恐怖心が繩上に蛇相を幻影して、それを逃げまどふ如き、或ひは白晝に夢を見つゞける如くに、眞實の世界への中にあつて、眞實を見ずに誤つた幻影的生存を展開し維持するものである。此の様な阿賴耶識が

淨められることは、夢心にたとえれば、夢さめることであるし、繩上の蛇相について言へば恐怖を去つて蛇相なき繩を見ることである。即ち、大圓鏡の如くになつて、眞實をそのまゝに影することである。然も、大明鏡はものを寫して餘りなく、ものそのものと一味になるのである。阿賴耶識が大圓鏡智になるとは、單的には、人間心が佛心に轉ずることであるが、佛心とは眞實そのものと一味なるもの、自ら眞實となつて一切を眞實に生かすものである。

宛も人間の生存は、阿賴耶識が眼識以下七種の識を轉變させて行くものであるが、佛智の働きとは萬有の維持者である眞實そのものに一味となつた大圓鏡智が、妙觀察智・成所作智・平等性智を轉起させて、眞實の中にあつて眞實を誤るものをば、眞實に立歸らせ、眞實に生きる様にする働きをなすものである。(大正大學教授)

☆

☆

☆

☆

新刊紹介

増谷文雄著

親鸞・道元・日蓮



至文堂、日本歴史新書

A五判一八二頁二二〇圓

昨年末の、ある晴れた日の夕方、私は所用あつて、横濱市戸塚の増谷文雄先生の書齋にいた。東向きの、前庭を越して、はるかに冬野をみはるかす、明るい部屋で、しばしの間對座して、話をきいた。

その時、先生の机邊には、書きかけの原稿が積まれてあり、話題がそれに觸れた時、先生は、いつものように謙虚なくちぶりで、しかも、一すじの信念を以つて、法然上人につ

いて書こうと思つてゐるのだといわれた。その時の言葉そのものはつきり覚えていないが、とに角、宗祖というものを、從來とは全然異つた角度から、そして、全然ちがう立場に於いてとらえようとされていることは、その口吻から、痛い程に感じられた。

「宗學からは、きつと手痛くやられるだろうと思う」

そうもいわれた。そして、その時、はつきりいわれたことは、書肆の求めが、親鸞・道元・日蓮であるが、自分としてはこれを法然にしぼつて書こうと思う。また、書肆に向つても、その題目に、「法然」を入れるようにといつたが、これは容れられなかつた、と残念そうにいわれたことである。

近來、とみに文名を挙げられ、二三の大學の講義や、ラジオや講演に寧日のない先生にこんな靜かな、そして、こんなに強い宗祖に對する關心のあることに、うかつな私は今更のようにおどろいて、その時は歸つて來たのである。

至文堂の日本歴史新書は、その大衆性の故に、日本の歴史を新しい方向に導く、非常に

有意義なシリーズである。その中に、純粹な意味で「佛教」について書かれた始めての著書としての、本書の意義はそれだけでも大きい。而も、本書には、たまたま、時代を同じくした四人の聖者を、相互關聯の中に、生々と描き出し、而も、その思想的焦點を、宗祖法然上人にしぼつて、その思想・信仰をくつきりと浮ぼりにして與えられたことは、このような著書の持つ大衆性の故に、おそらくは、他のいかなる方法を以つてする、宗祖顯彰にもまさるものがあると信ずる。

惡人正義は現代の吾々のためにこそ説かれたものである。親鸞のそれが、實は、既に、宗祖によつて形を成していたということは、學問の世界に於いては、色々に論議されるであらうが、私達、念佛をひとえに信じようとするものにとつては、むしろ、宗祖への距離を一そう、近くして下されたものとさえ思える。

私が、ここに饒舌をくるよりは、本書の一見こそ、新しい時代に生きる念佛行者の姿が、ありのままにみとられることを信じて、本誌讀者全部の必讀を期待する。(竹中)

新興宗教の分析 (二)

— 新興宗教讀本 その七 —

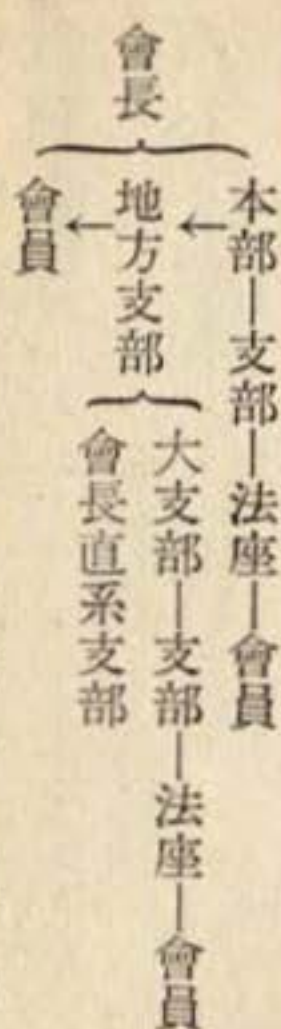


竹 中 信 常

三

新興教團の特性として、その教團組織の構造様式がみられます。既成教團は大體、寺院・神社・教會を小單位として、その下に特定壇家乃至信徒氏子を持ち、地域的ブロップの中單位、各宗各派等の大單位となつています。

この點は新興教團も



といった形態をとつています。靈友會の場合を例にとりま

すと (昭和二十七年調査)

地方大支部九、直系支部三 (東京・静岡・兵庫各一)

支部二九四 (關東二二七・奥羽一五・東海二五・近畿三三・甲信越四) 法座の數は關東二一七支部の下にあるものを挙げますと、東京一一九・神奈川四〇・埼玉三六・千葉一一・栃木一〇・茨城四・群馬二となつています。會員數は昭和二十四年末の統計では

教師 男五七 女一一 計六八八人

信徒數 一、八一五、九四五人

(但し昭和二十六年に大分裂をしているので現在の推定會員數は約半數とされましょう)

新興教團の教團組織の特質は會員制・役員制ということ

にあります。役員は教團組織の構成単位としてそれぞれのポストに配置されています。大支部の下には數萬人の人を導いて會員にした人が會長によつて任命されています。以下、支部長には五千人以上導いた人、法座の長即ち法座主には千人以上導いた人がそれぞれ任命されます。また大支部の中には「御旗組」と呼ばれるものがあり、これは特に會員獲得の上で成績のよい大支部に對して、紫地に白で題目を染めぬいた縦長で房のついた旗を會長が授與したものであります。

以上の如き組織はまた役員組織とも合致するので、信徒獲得の成績いかんでその階位が上下します。會員は法座主となるために「御導き」を一生懸命して會員をふやすことに努力します。このお導きの制度こそ新興教團が數的にぼう張する最大の手段で、日蓮系の佛立宗が初めてこの手段を用いて以來、今日では凡ゆる新興教團の常套手段とされるようになりました。教團によつて導く責任數は區々であるが最低五人から七人が普通で、これは先述の如く、役階が上がるといつた名譽心とか毎月支部で互ひに自分の導いた人數が發表されて、その數が多ければ自慢したり、少ければ信仰の不熱信さをせめられたりするという心理的效果をねらうのみでなく、教理上の逃げ手の一つとしても用いられています。

即ち、何かお願いひしても達成しなかつた時とか、それだけの御利益が得られぬ場合など、

その原因はすべて「信仰が足りない」——即ち「お導きの數がたりない」と決めつけられてしまふのであります。甚だしくは、「お導き」をせぬと「罰」が當るとさえ脅かされます。氣の弱い者ならこれ丈けでも會員獲得に熱心たらざるを得ません。佛立宗では昭和二十五年十一月から昭和二十七年四月までの一年半の間の信者獲得數を一人で最高百二十三人、平均七十八人宛と發表しています。又靈友會の調査の結果は回答數一四七三人で勧誘人員は八九、五人で一人平均六〇・八二人となつています。これは調査を本部及び婦人會で行つたので支部長クラスの人が大分いたので平均數が高くなつたようではありますが、それにしても決して少くない數であります。また靈友會々員が布教活動——即ち「お導き」を始めた動機を調査して、一八八二人中

先輩の指導

七二・三一%

自發的（教理に感動して）

九・七三%

神の啓示

〇・九二%

その他（功名心競争心）

一・一五%

の結果を得ました。純宗教的動機で始めたものは最も少く、大部分が「指導」——即ち「お導きをしなさい」という半命令的動機によつていることも、新興教團の會員獲得がいかに強く求められているかを物語つています。

このようにして求められた會員は強固なる封建組織の中に組み入れられます。自分を導いて下れた人は「親」とし

てその言動に對しては絶體服従であります。會員にとつてみれば法座主は「親」支部長は「お大親様」であつて上からの命令には違背することが出来ません。宮城博士は「人間診断」で靈友會長の雇人虐待を分析しておられるが、それと共に可成り上の男の役員までなぐられたり怒鳴られたりしているが、これもまた會長至上の絶體性の然らしめるところで、一種の天皇制的形態をとつています。このような強靱な封建制の中にあると、人々は自然早く上の階級になつて下のものに命令したくなります。丁度かつての日本軍隊の組織と同じく、自分の經て來た道をそのまゝに下の者に踏ませようとしします。そのために早く自分が親になつて「子」を持たねばなりません。お導きは更に一層熱心にされるようになります。而もこの親子關係を緊密にするために、ことさら横の連絡を遮斷します。即ち最低單位たる法座を中心として個々に縦にのみつながれています。

いくら隣り同士でも支部を異にしたり「導き親」がちがうものはろくに挨拶もせず、むしろお導きのためには相互に競争相手となり反目抗争さえします。内には親子という血縁的呼稱を使つて結合を強めると同時に、外にむかつては細胞活動を盛んならしめるための心理的・合理的組織といわざるを得ません。

四

近來の新興宗團の最大の強味は教祖が現存しているか、

或は死んでまだ間がなく、教祖を直接熟知している信徒を多く持つてゐるということであります。このことは宗教が「人間關係」を最も重要な要素としていますので非常に有利なことで、教典・法話・教義を通して間接的に觸れるのと、何を教えずとも現實にその姿を見その聲をきくことが、どれ丈け信徒の胸に共感を湧かせるか測りしれません。教祖の人間的存在に信徒は親近感を招くと同時に、自分でも努力すればという勇猛心も湧いて來ます。このような利點と共に一層重要なことは、その教義を時宜に適して應變せしめ得るということです。この點は既成教團に於いても、その創建の當初は全く同様の狀況であつたが時が經つにつれて宗學が固定してくると、社會的・時代的順應性を失つて融通のきかぬ古くさいものになつてしまいます。そしてこれを時代的に改變しようとはしますには、教團全體の意向をまとめねばならず、それには非常な努力と日時と費用とがかかるので、ついつい延び延びに見すごしてしまふのが現状であります。これに對して新興教團、特に教祖が現存している教團に於いては、その教義は現代の社會狀勢・思想傾向を基礎として構成されており、日々の變化に即應して、教祖の命令一下いかようにも變えてしまふことが出來ます。その適例は大本教（今日の愛善苑）では教祖がかつて明治五十年を中心として前後十年の間を「立て替え」の時代として大變動が在るとしたが、一こうそれらしいことが起らなかつたので「神が申したこともち

つとはのびることがあるなれど、のびるのも神界の都合にあることぞ」と宣言して、その時期を適當に延期してしまつた。靈友會では昭和二十二年發行の經典と二十四年發刊のものとは大いなる改編を行つています。觀音教では始め「手のひら療法」を患部に當てゝ行つていましたが、病人の身體に觸れると「醫師法違反」になるというので、たゞその上に手をかざすだけで電波が傳わるというふうに變えてしまつています。

また無肥料栽培も効果がなとなると、逆に適正な肥料を使うことを獎勵さえするようになりました。このような改變は更に高次化して、時代的適應を考慮に入れて行われ生長の家が近來盛んにフロイトその他精神分析學を教義の中に導き入れているのも、アメリカに於ける修正フロイド學派の流行を巧みにとらえたものというべきであります。

こういったことは教祖が自らの決斷でやれば即決し得ることとて、既成教團の場合とは全く隔絶した自由性を持つています。更にこのように教義や經典を改訂するための裏づけとして、新しいものを汲み取ると同時に、舊來のものをも不斷に攝取して行こうとしており、交成會の如き靈友會との分裂に際しては手廻しよくその教義擔當者を自分の教團に連れて行つてブレインにしましました。孝道教團もまたその教義の源流たる天台に關聯を深め、教團上の權威を得つゝあるといわれています。

いずれにしても教祖が現存するということは、信仰的に

も教義的にも絶對的な強みであり、此點、教祖を失つた世界救世教が教統の問題から分裂の危機を孕んでいることを思い合わせると、今後の新興教團が現教祖を失つた後に辿る道こそ、眞實にそれ等が向うべき運命を示すものとして注目すべきでありましょう。

五

教義が宗教の内面的・精神的側面であるとするれば、その外面的・身體的表出が儀禮となります。内面的な教義が合時代的に變革・改訂せられるとすれば、儀禮の形式も當然教義に即應した變化をみせるわけであります。そして儀禮について新興教團を概觀すると大體四つの主な特色を擧げることが出来ます。

第一は儀禮の近代化であります。舞踊と宗教との關係はシャーマニズムや神樂等の如く原始的宗教への逆行でもあり、また演劇化的變化の方向ともみられ、宗教の歴史の中では、さのみ珍らしいものではありません。然しその反面踊りを忘れた宗教というのも、何か餘りに枯淡であり老成を感じしめるようでもあります。信仰が若々しく熱があれば何かそこに躍り出したい衝動が感じられるのは、宗教の場合にのみ限らず人間が情緒的動物である以上必然的といわなければなりません。たゞその場合、その衝動を生まのまゝに表現するか否かによつて評價が異つて來ます。町の巫女が神がかりになつて御幣を持つて躍り出すのと、典雅

な雅樂のしらべにのつて洗鍊された姿態で舞う宗教的舞樂とでは格段の相違があります。然しこのように價値的なちがいとは別に、吾々が注目したいのはその時代表現の差異ということでもあります。此點「おどる宗教」のそれと天理教のそれとは大分異つています。前者の方がはるかに曲線的であり、スムーズでありまして、後者の律動的・直線的な感覺とは大分趣きを異にしています。更にP・L教團の如きは社交ダンスをとり入れ男女が相抱いてダンスすること自體一つの儀禮としています。ダンスを初める前にまづ、「みおや大神の御前に一同謹んで申し上げます。唯今より心淨めてダンスをさせていただきます。眞の男の道、眞の女の道を悟らしめ給え。男女がかもし出す高き境地に遊ばしめ給え。世の人々のために眞のダンス道を授けしめたまえ」とノリトを上げます。そしてこの社交ダンスとは男が陽で積極的に女子をリードし、女は陰で消極的にこれに従い、両者が一體となつて行くところに宗教的境地を見出して行こうとするわけなのであります。

若い男女に共感を呼ぶには適切な手法であります。その他近代音楽、討論會、信仰告白等が宗教行事の中に巧みにとり入れられており、發表欲求の旺盛な青年層にアツピールしており、特に信仰告白は後に述べる信仰心理の點でも、新興宗教の布教方法中白眉ともいえる重要性を持っています。更に注目すべきは、かゝる宗教的行事がすべて教役者と信徒全體との共同修法のもとに行われるという點で、佛教

寺院の法要形式が僧侶中心のカトリック的なものに對して、會衆合同のプロテスタント的なことが特徴といえます。これは一方では會員制度という組織上の關係で會員たるものはすべて誰でも一緒に儀禮に参加出来るという點を強調し、そのためにはユニホーム、バッチ、襷などを制定して會員相互の親和感と連帶性の意識を高め經典なども自由に読み易いように改め、どんな人間でも氣樂に参加出来るように仕組んであります。それと同時に、その會員は一部の幹部を除いては在家者であつて、一應職業化されていらないという點で、各自が自分自分のための儀式という意識を明瞭につかんでゐるために、儀禮への参加が積極的となつてくるのであります。

儀禮の共同化と教團組織の封建制とはひいては公共事業の推進の有力な基盤となつていきます。而もこれ等公共事業例えば共同募金運動・社會奉仕・災害者救護活動・病院學校經營等は、やゝもすると教團宣傳の絶好のチャンスとばかり、先年の「赤い羽根」問題の如きを引きおこすまでに夢中になります。然し既成教團側のお義理やつきあい程度の協力とは異り、教え親の命令という絶體性と共同體意識との複合から、會員達は自らの犠牲において、これに奉仕します。而もその一番の強みはかゝる行爲がそのまゝ教義と結びついて「因縁もどし」とか「贖罪」に轉化され、更には信仰確度のバロメーターとして巨大な勞働奉仕團の結成にまで伸展するのであります。

—大正大學教授—

浄土シリーズ

大野法道著

五重の話

- ★……四頁一部二圓、……☆
- ☆……百部以上一、八……★
- ★……圓、三百部以上……☆
- ☆……一、五圓 送料……★
- ★……五十部毎八圓 ……☆

本宗入門の式である大切な五重とは何にか、何を傳へどんないみがあるのか、大野博士が特に平易に解説されたもの。

法然上人鑽仰會發行

後記

○四季の移り變りの日本の風土中でも春は何にかと吾々の生活に希望を持たせて來れる「浄土」もその中に入つて、皆様と共に歩ませていただきます。

○本誌に毎回御執筆をいただいております、吉田絃二郎先生バルキソン氏病手術の爲に入院されましたが、その経過は良好との事、御全快をお祈り申し上げます。

○去る三月、日本橋三越で開かれた青龍展には本誌表紙の結城天童畫伯も出品、開期中には「浄土」を手に何人かの方が御覽になつたとの事、畫伯も喜んでみえました。

○十四、五、六の三日間、天候に恵まれて、大山本増上寺に於て御忌大法要が修せられた。唱道師を勤められた一人、山形の吉續豊明師の現代舞踊の東京公演が十六日

浅草松屋ホールで行はれた。吉續師より本誌編集部にも紹介をいただきましたが、手薄と仕事に迫られ失念いたしました事をおはび申し上げます。

○浄土教學院「佛教論叢」第四號が三月に出版された。こう云つた或る意味で地味な方面に一宗の努力が凝つて出來た意義は重且つ大である。主として昨三十年六月、京都知恩院に於て開催した宗學大會に發表を見た研究の結果が収められている。A五版八二頁（頒價一五〇圓）

○順調に回轉し出した編輯陣、少々私事のため、中下旬の發送が續き申譯なく思います。内容と期日とのづれから多くの御叱正をいただいております、御手数の段お許しの程を。

○五月號には五重特集を計畫しております、御期待下さい。

（水谷）

會費（誌代）

半年二〇〇圓・一年四〇〇圓です。前金切の節は、精算通知を致しますから、折返し御送金下さい。御送金は便利で安全確實な振替を利用して下さい、千圓まで二五圓の手數料で且、通信も書けます。新しい市は必ず縣名を、又、新規か繼續會員かを明記して下さい。

「浄土」 四月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和三十一年三月廿五日印刷
昭和三十一年四月一日發行

（定價三十圓）

編輯人 竹中 信 常

發行人 佐藤 密 雄

印刷人 春山治部左衛門

印刷所 共立社印刷所

東京都品川區上大崎一ノ七八三

發行所 法然上人鑽仰會

振替 東京八二一八七番

特價奉仕

一、寺院用佛具類一式

一、在家用佛壇、佛具一式

多少に拘わらず御用命或は御紹介下さい

東京都江東區深川三好町一ノ五長專院不動寺脇

區役所前

正本堂佛具店

電話深川(64)五八四八

團體宿御案内

一、當寺本堂庫裡再建完了しましたので五十名位までの團體宿泊を實費で引受ます。

東京都江東區深川三好町一ノ五區役所前

長專院不動寺

正 本 實 業
電話深川(64)五八四八

幼稚園 保育園 運動遊具

全國幼稚園・保育園・小學校・各團體に、良品を廉價にのぞ
ット1で、堅牢安全な遊具を納入、好評を頂いておられます。松
答・光明・芝、明照等の淨土宗幼稚園採用。



篠澤鐵工所

東京都大田區堤方町718
電(75)1024(池上驛東3分)

銀ブランコ2人乗	¥ 13,000
銀ブランコ3人乗	¥ 15,000
銀ブランコ4人乗	¥ 22,000
銀ブランコ6人乗	¥ 26,000
椅子ブランコ4人掛	¥ 13,500
太 鼓 橋	¥ 10,000
ジャングルジム中型	¥ 28,000
單式滑臺中型	¥ 23,000
複式滑臺中型	¥ 36,500
動物付き遊動木	¥ 30,000

此他各種、一報カタログ送

配達實費(都内横濱500圓以内
其他1000圓以内)組立無料。

小田原・熊谷・土浦以遠は九通
送り、(荷造費當社・送料着拂)

組立説明書送付